

II—II 古代日本人の世界賛歌

フランソワ・マセ

——『古事記』の歌の表現と和歌の誕生——

In Memoriam S. T.

S. T. T. L.

文学の分野では、文学を唯一つの、客観的な内容に還元することはできないという点について、すべての人の意見が一致しています。作品が本物である限り、内容と形式は、切り離せない関係にあります。それがすべての翻訳を不確かで、特に詩の翻訳の場合、殆んど不可能にしているわけです。というのは、詩の最も本質的な面の一つは、音楽性にあるからです。音、リズム、ひびきから成り立つ詩の音楽性は、少くとも、そこに使われている言葉の意味と同じくらいの重要性をもっています。

広い意味での作品と形式の物質性というこの分野では、詩は言葉によって与えられた可能性の極限まで行くことができますがこのことは、すべての作品にも無関係ではありません。

他方で、散文形式の作品の場合、その形式がより自由に見える可能性がありますが、それでも、大多数の作品が歴史書、小説、行政書などの、あるジャンル、あるモデルに属することに変わりはありません。また、これらのジャンルは、その形式と同じように内容によっても定義されるわけです。

日本の最も古い文献のなかには、定形に富んだ漢詩や和歌と並んで、明確なモデルに対応する散文体の作品があります。たとえば、『日本書紀』、『風土記』などがそれです。この観点から言えば、『古事記』は問題を呈しています。というのは、『古事記』は、それが書かれた時代の中国と日本で知られていた、どのジャンルにも組み入れられないように見えるからです。

『書紀』のように史書でもなく、小説や当時まだ知られていなかった物語のように、フィクションでもなく、一見したところ詩でもありません。

また、同じような作品の出現を促した様子もありません。『古事記』は、当時存在した百科事典的あるいは、哲学的な中国のモデルを採用するのではなく、出典として使われた作品もわからないのですから、それが神話と伝統を寄せ集めたものだ、と言うことも、問題の解決にはなりません。

詩、歌との比較が殆んど不可能のように見えるのに、ここで私が提示したい仮説は、『古事記』の文体と詩、特に和歌との間には、強い類似性があるのではないか、というものです。それは、『古事記』がアイヌのユーカラのように、韻文体で書かれた可能性があるというはっきりした理由からではなく、『古事記』の文体が和歌と同じリズム、同じ構造、そしてある意味で同じ必要性に対応している可能性がある、という理由からなのです。

この仮説の提示が恣意的なものでもなく、単に時代の関連性に基づいているのでもなく、『古事記』の形式の問題を新たに問い直す、つまり日本の文学と詩歌における、『古事記』の位置を問い直す機会を私たちに与えているのだということ述べたいと思います。

『古事記』と『日本書紀』

日本の歴史を、その起源から扱った『古事記』と『日本書紀』が、八年の間隔をおいて七二二年と七二〇年に宮廷に献上されました。『古事記』と『日本書紀』の目的はひとつです。つまり、皇室をおこした最初の祖先とされている天照大神までさかのぼることによって、皇室の正当な王位継承権を主張しようというものです。この記紀編纂の計画は、壬申の乱という内乱を経て初めて権力の座につくことのできた天武天皇までさかのぼりますが、このことは、記紀という二つの作品が存在することも、文字という手段に訴える必要性があったこと、記紀の間に存在する違いを説明するにも、不十分なのです。というのは、最も古い編年記として頻繁に一緒に引用されながら、古い伝統という共通の素材の取り扱い方が、詩と歴史書との間ほどにも、『日本書紀』と『古事記』では、異っているからです。¹⁾

一見すると、『古事記』は貧弱な印象を与えかねません。三十巻から成る『日本書紀』と比べて、与えられた素材である日本の歴史の一部分しか扱わない三巻の構成を、『古事記』はとっています。また、『古事記』の記述は、五世紀末の顕宗天皇の統治で終わり、その後、『古事記』完成のほぼ一世紀前の推古天皇の統治まで、単に皇室の系譜が続いています。それに

対して、『日本書紀』の場合は、その完成と書紀の扱う最後の年代との間には、二〇数年の隔たりがあるにすぎません。

『古事記』の場合、『日本書紀』と違って、各天皇の統治を用いた区切り方は厳密ではなく、神武天皇や応神天皇の場合のように、ある天皇の死後もその記述が続いたり、息子である倭建命の影にかくれて、殆んど記述のない景行天皇の場合のように、ある天皇の一生が殆んど付け加えのししか扱われないことがあります。他方では、中国の正史の基準に比べても、一番重要な欠点は、『古事記』のなかには、天皇の死などの幾つかの年代が用いられているにすぎないのです。その上、特に下巻では、大陸との交渉などに関する、『日本書紀』のなかに記されている多くの重要な出来事が省略されています。このことは、記紀のなかの崇神天皇や仁徳天皇などについての記述を比較すれば、すぐわかります。この問題に関して、『古事記』の献上相手であった元明天皇が熱烈な仏教信者であったのに、『古事記』のなかで仏教への言及が一度もなされていないことは、大変示唆的だと思われまます。仏教の導入という、八世紀の日本の社会にとっての重要な出来事は、全体的にすべての近い過去の出来事に関心のない『古事記』の編纂者たちの計画には、入っていません。²⁾

そして、用いられている言葉、という『古事記』の最後の弱点があります。『日本書紀』に用いられている華美な中国語に

比較すると、『古事記』の記述に用いられている言葉は、不器用に見えます。それは、実際に、日本語の言い回しを最大限に用いようとしている混種語ですが、中国文学に憧れ親しんでいた人々にとって、『古事記』を読むことが難しかったことに、変わりはありません。

『古事記』という何か

それでは、『古事記』は、編纂当時の出来事に応える、という意味しかもたないのでしょうか。『古事記』の序の中で表明されている、明らかに政治的な意味あいは、天武天皇、もっと一般的には皇室の覇権を保証する、という唯一つの目的のためになされた、事実の歪曲とでっちあげと同じものとされています。ただし、それが事実であったとすれば、同じ目的のもとに、教養語である中国語で書かれるという、当時のエリートのために大きな利点をもっていた『日本書紀』を編纂する必要は、わからなくなりますが。そうだとすれば、『古事記』は、よくできている思想宣伝の本でさえもないわけです。

ただ一つの、連続した記述をするために、異った神話や伝統から、唯一つの異本を提供することで、『古事記』は二つのタイプの批判に身をさらしています。それは、一つにはその記述が本当の意味で直線的でないことです。『古事記』の註釈者た

ちは、長い間、出雲神話の説明の問題に苦心してきました。というのは、この出雲神話は高天原神話からニギの天孫降臨神話へと無理なく続いている記述の、論理的展開を中断するように見えるからです。応神天皇の統治の最後につけ加えられている天の日矛などの話は、話の進行上、何の必要性もなく、さらに一層余分に付け加えられた感じを、私たちに与えます。

他方で、『古事記』の記述上の一貫性の欠如は、たびたび問題とされてきました。例えば、イザナギ一人から誕生したスサノヲは、妣ハハの国、根の国へ行きましたが、また、そこで使われている漢字は、死んだ母親を意味する漢字なのです。『日本書紀』の本文は、こういった論理的難しさを上手に避けています。

『古事記』の現在存在する上中下巻の分け方に従って、私たちは三つのタイプの作品を読むことができます。最初の神話的上巻では、神話だけが存在していて、人間との関係は間接的です。中巻は、いわば叙事詩体と言えます。ヤマトタケルの命の姿に代表される、英雄の時代を描いています。下巻は、記述の大多数が歌の支えとしての役割しか果たさない、歌物語のように見えます。これら三巻には、多くの場合、三巻それぞれに、神話の専門家、歴史家、文学の専門家という三つのタイプの専門家が関心を示しています。このような状況で、これらのアプローチのうちの一つ、つまり『古事記』の一部分だけがこの上

もなく熱心にとりあげられることが多いのが実情です。

とは言っても、『古事記』は、江戸時代にいわば再発見されてから、厳格な国学者ばかりではなく、多くの読者を引きつけてきました。『古事記』から発散している魅力を理解するには、私の考えでは、効果的な方法として、その対象のすべて、つまり『古事記』を一つの作品としてその全体を取りあげるべきだと思います。つまり、『古事記』を、内的統一性をもつ、完成した作品と見るわけです。この統一性を浮き上がらせるためにはフランスでも日本でも、もう流行ではなくなっていますが、私はレヴィストロースが与えているのと非常に近い意味で、『古事記』の構造ということを確認に論じることができると思います。⁽³⁾

古事記の構造

少し注意深く『古事記』をよむことによって、神話や伝統、歌謡の韻律学に親しんでいた人々には、明らかであったはずの、すぐれた一慣性や微妙な対応のかけひきを、私たちは、そこに読みとることができません。

一見したところでは、この種の主張は根拠がないように見えるかもしれませんが、この主張は、『古事記』という

作品の外にある過程から出てきたものでも、十分な考察を行わずに出てきたものでもありません。十五年ほど前に、『古事記』と『日本書紀』の記述に認められる三つのまとまりについてのエッセーを書きました。⁽⁴⁾ 大林太良先生や三品彰英の研究によって既に解釈が進められていた火や光の中での出現、海辺での誕生などのいくつかのテーマの繰り返しは、私に、日本神話のなかに、同一の構造にもとづいてつくられた、私の言う神話連続というまとまりをもった単位があるのではないか、という考えを想定させました。秩序の出現を語り、火の中での誕生で終わる第一の部分には、海辺での誕生で終わる他界への旅を描写する第二の部分が対立しています。そして第三の部分には、第一の部分を呼応している征服という特徴が読みとれるのです。すなわち二プラス一という形なのです。そこで、私は次の段階として、同じ仮説に立ちながら、『古事記』という一つの作品全体を読む、という試みを行いました。この機会に私は、中巻が、上巻とその神話連続の構造と直接照らし合せることなしに理解できることを、明らかにしました。結局、上巻の内容は、中巻の中で用いられているテーマのヴァリエーションによって、だんだん明らかになっていったのです。それは、例えば木の花の佐々夜毘売と沙本毘売⁽⁵⁾、あるいは本牟智和氣と須佐の男、または神功皇后と伊耶那岐を比較してみれば明らかになります。はじめに私は、歌謡がふんだんに用いられ、しかも神話色の

ある出来事が含まれていない、という理由から、他の二巻と非常に異った特徴をもつ下巻に、上中巻に試みたと同じ分析が可能だとは思っていませんでした。ところで、神話連続の中にみられる左右対称の關係によって結びつけられている二つの部分と、最初の部分を呼応しているもう一つの部分の存在から、私は、神話連続の間にもみられるのと同じ關係にある、より大きなサイクル（神話群）の存在を想定しました。つまり、神話連続、それをさらにまとめるサイクル、そして『古事記』全体という三つの段階で、三つの要素から成る構造を内にもつ『古事記』の全体が現われたわけです。すなわち、最小の単位である神話連続の構造と『古事記』全体の構造とが一致しているということです。

この分析の初めの段階で、私は、天地がまだ未分化な時代から顕宗天皇のように、完全に人間の天皇となる時代へと続く記述を展開している、新しい研究対象に直面しました。この記述は、直線的でも、平坦でも、単調でもなく、リズムを伴っているのです。その上、『日本書紀』のように、未来に向かって開く必要のある歴史書とは反対に、『古事記』の記述は、閉ざされたかたち、つまりそれ以上に続けることができない作品、として現われてきました。実際に『古事記』には、『続古事記』は存在しませんし、特に近い過去の出来事に関心を示さない『古事記』には、続きの存在する理由がないわけです。それは、

『古事記』が、記述の対象とする創始の出来事しか扱わないからであり、その上、『古事記』が年代順に出来事を書き連ねるという構成をとっていないことからもきています。『古事記』が推古天皇以後中断される理由をめぐる幾つかの仮説は、現在のところ立証ができないわけです。

このように『古事記』は、閉じられた形もっています。最後の大きなサイクルを締めくくる顕宗天皇のあと、物語を続けることはできないわけです。『古事記』は、現在に結びつく必要を少しももっていないのです。その目的は、私の考えでは、ほかにありません。最後のサイクルの中に模範的な天皇を配置してしまうと、『古事記』には、歴史は必要ではなくなるのです。そこで私たちは、そのタイトルふることのふみが要求しているように、古い事がらだけを閉ざされた形の中で描写する、という、『古事記』が要求しているものとの合致、ということを描測できるのですが、この閉ざされた形は、他の問題を呈しています。

その一つは遠い過去との關係です。『古事記』は、神代と最初の人間の天皇を結びつける物語を、遠い過去の中に留めることによって、過去との關係のし方に新しい道を開いています。ここで私たちは、新しい全体を作り上げるために、神代が人間の時代の始まりにまで、はみ出しているような印象を受けます。そしてこの全体は、原初の時代の役割を果たしているように見

えます。

実際には、このような制限を設けることは、物語を閉じるという論理に応じたことから生まれたものだと考えられます。当時手に入れることが可能であった情報全体のうち、『古事記』は崇神や垂仁天皇の場合のように、省略という代価を払いながら、その一部分しか用いていません。このかたちの論理から見れば、すべてを語り、伝達するのは無意味なわけです。というのは、その形式そのものが、情報の全体と同じくらい重要な意味を提供しているからです。このことは、この二つの要素によってリズム付けをされた物語の、閉ざされた形、についての第二の問題、つまり詩の領域における定形と呼ばれる形との関係を想定させます。そこで、この問題について触れたいと思います。

『古事記』の形成

私たちがリズムやひびきを問題にする場合、音と同じように、物語のイメージや筋も同じ様な問題をもっていることを考えていただきたいと思います。これまで見てきたように、『古事記』の基本的単位は、火の中での誕生と海辺での誕生という全編で繰り返されるモチーフを取り巻く二つの結びつきの対立に裏打ちされた神話連続です。ただし、この繰り返しは、決して機械

的なものではありません。一方で、左右対称と対立の組み合わせが、反復するモチーフを変換して、異ったテーマのヴァリエーションを作り出しています。たとえば、カクツチという火の誕生、同じモチーフから生まれたコノハナノサクヤビメの出産やサホビメの稲城のなかでの出産、などを考えていただければよいと思います。

この三つの要素からなる構成に支えられたかたちに焦点をあけると、これまでに私たちが問題にしてきた『古事記』の幾つかの特殊性がわかりやすくなります。例えば、高天原神話と天孫降臨神話の間に挿入されているオオクニヌシの神話は、大きなサイクルの最後の、音楽で言う弱拍にあたると考えられます。それで、リズムによる調子づけという観点から言えば、この大國主神話は不可欠なわけです。というのは、この神話は、黄泉よみと高天原という単純な白黒の対立関係から、根の国を入れて他界というテーマを浮き彫りにする、という役割を果たしているのです。別の言葉で言えば、リズムの存在は、単なる直線的記述が浮き上がらせることのできない要素を、導入することを可能にしているのです。

もう一方では、神話連続の構造の強さが物語の記述の展開に従って変化する、という特徴があります。この記述の構造と論理の間の関係でおこるヴァリエーションは、『古事記』のなかで明白に語られていた事がらを説明するのに、役立っています。

例えば、『日本書紀』は、崇神天皇の時代に崇神が天照大神を恐れて、天照大神と同じ大殿に住まないことを決めた、と記しています。この話は、人間の世界と神の世界を明らかに引き離れたことを示しています。しかも、伊勢神宮の起源とも関係のあるこの話は、『古事記』の中には出てきません。この二つの世界の断絶を示すために、『古事記』は、神話の論理にしたがう物語記述と話の筋の間に見られるズレ、という別の手段を用いています。

『古事記』を、年代順に続く物語記述の連続である『日本書紀』に比較できる本、としてではなく、これまで見てきたように、リズムによって構成された形がつくり出す定形の作品、と見ることによって、私たちは『古事記』が全てを語る必要のなかったことがわかります。

この仮説に立つことで、一つには、『古事記』による事からの選択は排他的ではないのだ、と考えることができます。それはつまり、『古事記』が語らない事からは切り捨てられたのではなく、逆にこの選択は『古事記』編纂当時の聞き手・読み手に知られていた伝統の全体を前提になされた、という見方に立つことを可能にしています。

『古事記』を定形に近い作品と仮定した場合、第二の問題として詩、特に定形詩が簡潔な形によってある事柄の全体を表現できる、という特徴が問題になります。この点について私は、

詩との関連で言えば、『古事記』の編纂者たちの記述方法は、長歌やある種の中国の詩のスタイルに対して、和歌の創始者たちの記述方法に近いのではないかと考えています。

古事記の世界賛歌

そこで問題になるのは、『古事記』の構造に認められる、このある種の定形が、『古事記』の、独自で非典型的な性格を一層強めることになる、孤立した現象を意味するのかどうか、という点です。散文との関係からは、類似性をさぐるのが困難なことは既に見ましたから、詩歌との関係の問題が残るわけです。

もしも『古事記』の記述形式が、既に知られている他の例に直接結びつけられないとしても、だからと言って、それが何の特徴もない、無意味なものだ、ということにはなりません。『古事記』の記述には、ある種のリズムが存在します。それは、物語記述の、ある種の配列の理解を助けていた、一言で言えば、存在理由のあるリズムだ、と考えられます。

これ以上に仮説を押し進めることは危険ですが、『古事記』がもっているこのリズムと構造には、少しも強制的、あるいは不自然で外から押しつけられた性格がない、と推測することはできます。別の言い方をすれば、この表現方法は、与えられた素材を、詩に近い、全く新しい形にうつしかえることを意味し

ていたのではなく、逆にここで用いられている形式が、ある意味で素材と一体を成していた、つまり素材から生まれた形式だった、ことを意味しています。私たちは、素材の理解のために、この形式が必要だったのだ、と推測することができるのです。言葉を換えれば、神話は単にその内容から見て大切な記述が問題になるだけではなく、ある条件のもとでは、ある形と切り離せなくなります。その上、この全体形式を用いることによって、すべての神話や表面に現われていなくてもいつでも使うことのできる神話のヴァリエーションを、毎回使う必要はなくなります。

これがすべての神話記述の場合にあてはまる、とは言いません。ただ、文字文化の誕生以前に、その肉感的とも言える美点のために、語りに与えられていた重要性を考えると、次のようなことが言えると思います。つまり、神話記述は、直線的な語りのなかで、事柄が単につなが合わされただけの平たんな記述ではあり得ないこと、逆に、原初の時代の語りが、宗教的コンテキストと切り離せない以上、それが芸術的創造や語りの分野で、人間が想像できる最上のものを示しているだろう、と考えられる、ということです。詩歌、歌謡そして神話の関係は、上手くないはずはないのです。

私の仮説は、神話と詩歌が切り離せない関係にある創造が可能だ、という前提にもとづいています。私のこの仮説は、神話

におけるイメージや音の配置が、定形詩におけるのと同じように、言葉のもつ意味と同じ重要性をもっている、という前提に立っているのです。

つまり、この仮説に立つと、神話を語るときにできてくるリズムが、単なる言葉の表現とは異った感動、感情を神話に与えるだけでなく、対立や類似の関係が生み出すリズムが、全体との関係のなかで理解されるべき、それぞれの要素に副次的意味を与えると共に、全体の枠組からみると、別の話（内容）（内容）を作り出すことが理解できるわけです。

この別の内容をもつ話（ディスコース）は、火の中での誕生と海辺での誕生という結びつきの対立を中心とする『古事記』の一貫性を、浮きあがらせています。この結びつきを取り巻く対立は、死と不死、近い結婚と遠い結婚、稲の栽培と獵などの非常に多様な問題を扱うことを可能にしています。初めの結びつきは、火を中心に、近い結婚である近親相姦・植物・文化・死・現世・閉ざされた空間を扱っています。第二の結びつきは、水、遠い結婚・動物・自然・不死・他界、開いている空間を扱っています。つまり、この二つの結びつきを用いることによって、『古事記』の中では、世界に内在する全ての複雑さと矛盾が示され、説明され、歌われているわけです。

これまでに見てきましたが、結局、『古事記』は世界を歌っているのだと考えることができます。原初の出来事を語りなが

ら、世界を歌っているわけです。その手段として、様々なテーマのイメージやヴァリエーションが駆使されています。このように、物語記述とイメージを出発点として、最も抽象的な問題までを幾つかの調子に合わせて歌うことから、一種のメロディがつくられています。この『古事記』が生み出す音楽は、本当は暗い音楽ですが、近親相姦と死の問題に始まって、主権、そして人間世界を織りなす極限の問題までを扱っています。おそらく、『古事記』はこの理由から神代を扱うことだけでは満足せず、最初の人間を歌ってまいるのです。

他の民族の文化について私たちが知っている事から考えても、私たちは日本の神話が、ある条件のもとで語られていた、と推測することができます。しかもこの語りは、何かを学ぶ、知る、という目的で行われた、とは思われなないのです。それは同時に、言葉のもつ力によって、この語りが一種の神を呼びおこす力、儀式的効果をもっていたことを想定させています。この見方に立つと、リズムは最も重要になります。この神話の語りは、ですから、神と人間の間に位置する、と言われる和歌と、類似しているはずなのです。和歌は、神の世界と人間の世界に橋渡しをしているのです。これは、『古今和歌集』の序で紀貫之が彼流に言っていることです。詩歌が宇宙のごく初まりに出現するのは、詩歌が神の時代の特徴をもっているからなのです。従って、スサノヲが出雲の国を歌ったとき、これは最初の和歌

と言われていますが、それは決して偶然とは思われません。

八雲立つ 出雲八重垣 妻隠みに 八重垣作る その八重垣を
最後に、これらの神話と伝統がどのように記述されたのか、という問題が残ります。『古事記』は、その序が示しているように、原始的な神話記述を忠実に移しかえたものではありません。『古事記』は、それが編纂された時代の、正に語りから記述へと神話に変化する時代に位置しています。つまり『古事記』は、この変化に続いて現われた作品なのです。このことは太安万侶が稗田の阿礼が暗誦した『古事記』の原形をできるだけ尊重しようとした、と言っていることを見ればわかります。それでも『古事記』は書かれた作品であり、書かれた作品として構想されたのです。

このことから、私たちは『古事記』がもっている定形が、部分的には、この記述形式を決定するプロセス、特にこの簡潔なスタイルを選ぶに到ったプロセスから生まれたのではないかと問うことができます。というのは、その素材の性格から言って、『日本書紀』のように『古事記』がもっと長い作品になっただけの可能性もあるからです。

また、『古事記』のなかに見られるリズムの問題から言えば、大きなサイクルと神話連続それぞれの段階において、左右対称の均衡が、認められることがあげられます。そして、このどちらの段階においても、最後の部分が最初の部分と呼応していま

す。ここで、和歌の問題を見てみたいと思います。最初の和歌は、多くの場合、この二プラス一という構造と非常に近いかたちをとっています。具体的には、一つに、まだ和歌の五七五プラス七七という古典的かたちができあがっていません、五七と五七プラス七という形をとっていること、しかも初めの五七と五七が強く結びついて、最後の七字から成る句が二番目の句の繰り返しになっていることがあげられます。例えば、仁徳天皇の歌への返し歌として黒姫の歌とされている次の作品を見てみましょう。⁷⁾

倭方に 往くは誰が夫 隠津の 下よ延へつつ 往くは誰が夫⁸⁾
 ここで、『古事記』と最初の和歌のかたちの間に、完璧な一致がみられる、と言ってしまえば、軽卒になります。と言っても、この両者の間に強い類似性が認められることに変わりはないと、私は思います。つまり、私たちは、この変化をもたらしただ最も大きな要素が、神話の語りと強く結びついた、左右非対称で、しかも三つの要素から成るリズムの存在であった可能性がある、と考えることはできるのです。そしてこのリズムは、文字との対決をせまられることによって、再び活発になったのかも知れません。このことは同時に、和歌の原形が、他の分野で用いられていた、より古い時代の、三つの要素から成るリズムの存在と関係があった可能性がある、ことも意味しています。この奇数の性格は、無際限に繰り返される可能性をもつ、左

右対称を打ち砕くことを、可能にしています。それは、詩ばかりではなく、人間世界の閉ざされた性格を浮き彫りにもしています。私の考えでは、それは『古事記』が私たちに示している偉大で、しかも厳しい教えの一つなのです。

『日本書紀』がすべてを年代順の綱目に組み込むことに工夫を凝らしているのに対して、『古事記』は、歴史という素材から、その神話的枠組に入れられるものだけを、とりあげています。もし、『古事記』に認められるリズムが、ある種の神話表現と結びついているのだ、と考えると、この点について、神話思想という綱目を通して読まれた伝統を表現することも可能だと思えます。私は、この理由から、『古事記』が不変の伝統を保存している最後の生き証人なのだと思います。

『古事記』の記述は、むしろ、大陸文明のインパクトをきっかけにおこった伝統的なリズムをもつ神話的思想の反応の結果できあがったのだ、と考えられます。もしそうであれば、この思想の一種の制度化に、私たちは出会うこととなります。もっともそれは、はっきり表現された一種の神学のような形をとるのではなく、古い三つの要素から成るリズムの中に、伝統的な内容と新しく生まれつつある形を一つにした作品つまり『古事記』という様相で現われたのです。

この伝統とある形を結びつけるという作業は、いわば緊急の必要性という条件下で行われたのです。この急務は、日本文化

の主要部分のすべてで、中国化の完成が進んでいた七〜八世紀に位置しているのですから、当然観念的なものでもあったわけです。また、その反応として、『古事記』や和歌などがその良い例ですが、意識的この中国化の波から守られた領域がつくられてもいったのです。

『古事記』は、自身の過去の土着の部分を守ろうとする意志の証人として存在し続けています。そのすべては、和歌のように、中国文学と思想のインパクトに対するやまと言葉と日本的感性からの答えだった、と考えられます。『古事記』は、伝統の全体、別の言い方をすれば、ある種の世界観を一度に把握しようという壮大な努力の結晶のように現われています。それが『古事記』を、神の時代から人間の時代への移行という原初的時期を生き生きとしたまま残そうとする、一種の人間世界の全体を歌う和歌、つまり他に例のない作品、に仕上げているのだと、私は考えています。

註

- (1) 拙稿「日本の伝承記述に見る二つのエクリチュール・『古事記』と『日本書紀』の文体比較の試み」『現代思想』一九九二年、二〇巻、四号、五八頁・六九頁、訳美枝子マセ。
- (2) 津田左右吉の『日本古典の研究』に基づいて井上光貞氏は「古事記では、つぎの仁賢天皇以後には系図の記載しなく、物語は一つも記されていない。このことは、旧辞が、神話からはじまって顕宗天皇までで終わっていたことを示している」(神話から歴史へ一五頁)と説明しますが、この説明は不十分だと思います。
- (3) 拙稿『古事記神話の構造』中央公論社
- (4) "Origine de la mort en voyage dans l'au-delà? Selon trois Séquences mythiques du Kojiki et du Nihonshoki", Cahiers d'études et des documents sur les religions du salon I.
- (5) 拙稿「垂仁天皇記の構造分析」『ユリイカ』一七巻、一号、一九八五年
- (6) 『古今和歌集』岩波日本古典文学大系、九三〜九四頁
- (7) 土橋寛『古代歌謡論』三一書房
- (8) 古事記歌謡五六、『古事記』岩波思想大系、二二三頁